英語教育実践研究会

授業実践研究

第 4 号

巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 4 回研究会事例発表 1 ・・・・・・・・・2
第 4 回研究会事例発表 2 ・・・・・・・・・4
第 4 回研究会事例発表 3 ・・・・・・・・・6
会員の広場 ・・・・・・・・・・・・・・・・8
2020 年度会計報告・・・・・・・ ・・11
2021 年度研究会のご案内 ・・・・・・・・11
編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・11

＊＊＊＊ 巻　頭　言 ＊＊＊＊

コロナカノヨノナカ

前田 隆子
(明海大学)

今からちょうど 1 年前の 2020 年 1 月下旬の頃を思い出してみる。日本で最初の新型コロナウイルスに感染した患者が報告されたのが 2020 年 1 月 16 日で、ニュースやワイドショーを横目に見ながら､「恐ろしいウイルスが出てきたなぁ。」と思いつつも、自分は成績提出の締切りに追われ、この先どんな未来が待っているかも想像すらせずにいたような気がする。

今、この 1 年を振り返ると、未知のものへの恐怖で一旦思考も行動も停止したが、その後どうしたら学生たちの学びを守れるのかに試行錯誤しながら奮闘し、マスクの日々に文字通り息苦しさを感じながらも、今はどうにかこうにか 1 年を終えた安堵感がある。おそらく教育に携わる方もそうでない方にとっても、試練の 1 年であり、同時に困難に立ち向かうときの人の強さを感じたのではないだろうか。

大学教育の現場では、オンライン授業、オンデマンド学修、ハイブリッド型授業等が実施され、様々なシステムを駆使し、教員それぞれも工夫を重ね､少しずつ前進したように思われる。筆者の大学では manaba という Learning Management System が採用され、講習を受けながら、多様な使い方を学んだ。筆者の場合は課題提示型授業＋時々Zoom という形態が中心であったが、その際に心がけたことは、①学生の質問メールにはできるだけ早く回答する、②課題の量を微調整しながら、学びの質を保証できる最適な量を見つける、③学生が単位取得をあきらめないように声をかけ続けることである。①と③はほぼ達成できたが、②は 1 年経っても悩みの種であり、継続研究課題となった。学生が課題をためがちなのと同様に、教員もフィードバックが滞ることもあったが、そこはお互い様。待てるものは待てば良い。Zoom をすれば、落ちる、固まる、途切れるなど必ずどこかで問題が起きる。IT とはそういうものだ、と割り切ることも肝要だ。

こうして、個人レベルではコロナ禍の世の中に適応し、寛容性も身につけられたように思うが、社会を見渡すと、不寛容があふれているように感じる。正義を振りかざす「マスク警察」、「自粛警察」をはじめ、医療従事者もしくは感染者への差別や暴言など、様々な怒りの爆発を目撃する。分断するのか連帯できるのか、私たちはコロナウイルスに試されているのかも知れない。

コロナカノヨノナカ（コロナ禍の世の中）を生きる私たちは、この先どうなるのだろうか。いつの時代にも災いはつきものだが、人として生まれた以上、「災い転じて福となす」ように、この時を変化のチャンスと捉え、知恵を絞り出し、人々と協力し合い、出来たことに喜びを見いだし、一歩ずつ前に進めるよう生きていきたいものである。

2020 年第 4 回英語教育実践研究会
事例発表

新しい英語発音を中心とした自己学習プログラム開発研究
―産業能率大学経営学部 1 年必修英語の試み―

池田るり子
（産業能率大学経営学部）

１．はじめに

産業能率大学において、本学英語教育改革推進プロジェクト委員会での検討の結果、2020 年度より、1 年次必修英語科目「英語Ⅰ・Ⅱ」を英語発音教育中心の新しい授業構成へ改革変更され、リチャード川口客員教授を迎え、事前英語教育研修を終えた新しい 12 名の英語担当教員のもと、新規科目としてスタートした。

本学の学生においては卒業後に求められる「自分で考え、英語で表現する」自発的な英語表現力の必要性があり、英語学習継続のための「参加したいと思わせるより楽しい授業への取り組み」も必須である。

2017 年度、1 年生必修科目「英語Ⅰ・Ⅱ」一部クラスにおいて Phonics を導入し、英語教育改革へのトライアルが行われた経緯があった。残念ながら、通常のテキスト中心とした一般的な授業からテキストを使用しない Phonics への導入にあたり、事前研修は 1 日行ったが、当時の担当教員の Phonics での英語教育の経験度も少なく、テキストを使用しない授業への違和感を教員間で取り除けなかったため、テキスト中心の授業に Phonics を導入する形式でスタートした。結果的には音として学ぶ英語教育に手ごたえを感じたが、学生の授業評価の結果から、「参加したいと思わせる、より楽しい授業への取り組み」までの変革には至らなかった。また、残念ではあるが、基礎英語力があっても、話す英語への苦手意識が高く、「英語を楽しく学ぶ」ための課題が残った。

２．2020 年度 1 年生必修英語科目「英語Ⅰ・Ⅱ」の目的と概要

この授業の目的は、①発音を学ぶ②英語表現の幅を広げる③日本と英語圏での言葉のしくみや文化・習慣の違いを理解する、ことにより英語だけにとどまらず、日本語も含めた「話す・伝えるためのコミュニケーションの強化」へつなげていくことである。

授業概要としては、「英語Ⅰ」では、「発音」と「表現」をテーマに学び、「英語を使うことに慣れる」「英語を使う環境を提供する」ことがこの科目の基本コンセプトである。リチャード川口客員教授の産能大学オリジナル映像による授業と担当教員によるペア及びグループワークで学ぶ。担当教員は、リチャード川口客員教授のファシリテーターとしての役割が強く、基本授業講義は映像による授業である。海外に出ることが英語力アップの唯一の方法とは限らないという考えのもと、まずは自分で使ってみようと思うこと、それが何よりも大事なことであるとし、国内で英語力とコミュニケーション力をアップさせて、その力を海外に出て試し、海外の人や文化に触れ自分の視野を広げる。まずは使うことからはじめ、英語を使うことを楽しむ授業内容になっている。

「英語Ⅱ」では、「発音」と「英語脳 3 本柱」をテーマに、前期の「英語Ⅰ」同様、リチャード川口客員教授の映像による授業と担当教員によるペア及びグループワークで授業を学ぶ。「マインドセット」「SV 語順思考」「シンプル日本語発想」という英語脳 3 本柱の基本コンセプトの下、「欧米人の気持ちになって、前向きでポジティブであること」をよしとし、「英語と日本語の違い」「SV 語順思考」を理解し、「シンプル日本語発想で、沈黙をつくらない、会話を止めるな思考」を習得する。ありがちなシチュエーション（状況設定）ごとに「これを英語で言いたかった」「あの時英語で言えなかった」ことを「英語脳」を使って解決する。

３．英語教材開発及び新教員体制と育成、楽しく学ぶための環境づくり

「英語を楽しく学ぶ」ための教材開発を強化し、産能大学オリジナル「テキスト」、映像教材「発音編」「表現編」「英語脳編」、発音アプリ「産能英語道場」を開発した。アプリは携帯から、映像教材は、大学英語学習用システム「Glexa」上から、授業外学習として、いつでもどこからでも学習できるように設定されている。

教員体制については、新しい英語教育初年度に向けて、新たな専任教員 5 名の採用を含む 12 名全員専任教員での新担当教員組織の下、

前期、後期開始以前に 5 日間の実践的な教員育成研修を実施した。担当英語教員全員の模範授業を参観することにより、教員間での授業運営や英語教授法の情報交換、結束力を高めることができた。専任教員で担当する利点は、通常の業務時間内での会議や研修等設定しやすく、授業開始後の情報交換や意見交換等の相互教授が容易に行うことができ、と同時に親密度や理結束力がより高まったことである。

教室については、英語専用教室を 4 か所設置した。全教員が、この 4 教室を使って、週 2 回 28 回の授業を実施する。2 教室は既存のアクティブラーニング教室を活用し、ひょうたん型の机とポップな英語ロゴのデザインに壁を改装し、残りの 2 部屋は、机のない床に座って授業を受けるタイプの教室で、床はカラフルな柄に張り替え、大きなクッションや大きなぬいぐるみ、変装グッズ、バインダーを設置した。全教室共に、広い教室を自由に歩き回れる他の教室にはない異空間の雰囲気を持っている。

クラス構成及び人数については、プレースメントテストによるレベル別のクラス分けの廃止、20 名の少人数制、今までより 10 名ほど少なくした。個人指導がしやすい環境に変わったと同時に英語の苦手な学生の存在するクラス分けとなるため、個人指導が重要となる。

スペシャル回として、通常の授業以外に、発音ブラッシュアップ、1 クラス 3 名の外国人ゲストとの交流等、通常の授業以外に計 8 回の実践的に英語を使う機会を提供できた。

４．面接授業から Zoom 授業への移行の利点

今年度はコロナ禍の中、面接授業からオンライン授業への実施に変更を余儀なくされたが、授業構成が映像による講義と教員による指導により、授業運営構成と役割分担がはっきりしていたので、面談授業からオンライン授業への移行は、特に問題なく、スムーズに実施できた。

Zoom 授業への操作や指導方法などは、教員の努力と工夫に委ねられたが、1 年を終えて、学生授業評価の結果からも、満足度が高く、特に楽しく英語を学べたという意見がほぼ全員だったので、成功したといえる。

オンライン授業での利点としては、メインになる発音指導については、教室での面接授業と違い、個人の部屋の中におり、ミュート機能やブレイクアウトルーム機能を活用することにより、学生が周りの人の気配を気にすることなく、大きな声での発音練習、教員による個人指導や熱心な改善への努力傾向が見られたこと、教員が、個人の特徴の把握、適切な指導ができたことである。

グループによる英語表現での発表も zoom というバーチャルな異空間により、羞恥心が消え、表現力が増し、楽しく英語を話す様子がうかがえた。バーチャル空間では、声も大きく、堂々と自分の英語を話すことができていた印象が強い。

５．本学のグローバル化の推進と 2 年次以降の英語改革について

本学でのグローバル化の推進の動きが 2013 年から 2020 年までの 7 年間に加速し、国内英語キャンプ、海外研修（カナダ、アメリカ、ベトナム、台湾）、海外インターンシップ、学内英会話教室、英語学習相談室、英語ピアサポート、グローバルコース開講、1 年次英語Ⅰ・Ⅱの改革等 16 の新しい改革に取り組んだ。

2021 年度は、2 年次以降 4 年次までの英語科目については、「生活や留学」を意識した内容への改革を行い、「発音の鬼」「ロジカルプレゼンテーション in English」「アメリカの文化と言語」「グローバル・コミュニケーション」「Active English」等新規科目も含め、16 科目を設置している。

６．おわりに：産業能率大学での英語教育への課題

1 年次の英語Ⅰ・Ⅱについては、欠席者がほぼいない状況で、前期は F 評価なし、全員合格であった。授業評価後の学生の声として、「英語の授業が楽しかった」、「苦手意識がつよかったが、話すことが楽しいと思えるようになった」「2 年生になって自由科目になっても英語の勉強を続けたい」等高い評価を得た。初年度としては、目的は達成できたのではないかと思われる。

課題としては、英語教員全員が初年度をオンライン授業でスタートし、今後、zoom 授業に慣れている現状から面接授業になった場合への移行がうまくいくか、不安に思っている教員が多い。課題解決方法としては、意見交換や相互教授も含め授業開始前の英語教員育成研修の再実施が必要と思われる。新し英語教育とは何か、今後も調査研究を続けていく予定である。

2020 年第 4 回英語教育実践研究会
事例発表

コロナ禍の遠隔授業における非言語メッセージ

水口 小百合
(江戸川大学)

１．はじめに

本稿は、新型コロナウイルス感染症の拡大予防対策のために実施した遠隔授業において、学生の非言語メッセージの発信が限定的になった事実に着目し、この一年の授業の中で観察された学生の行動や、筆者が試みた授業実践を報告するものである。

２．授業における非言語メッセージの役割

多くの先行研究が提示するように、非言語メッセージはコミュニケーションにおいて大きな役割を担っている。それは言語習得の中では特に強調されて、語学科目の教師が積極的に非言語メッセージを用いて、学習者との信頼関係を構築したり、内発的動機を刺激するポジティブな感情を学習者から引き出そうとすることが多々見受けられる。非言語メッセージは、顔の表情やアイコンタクト、声の使い方や身体の物理的距離まで様々だが、いずれも私たちの感覚器官を用いて知覚するものであり、対面授業において効果を発揮できるものが多い。

３．遠隔授業導入直後の授業

筆者が勤務校で担当している英語の授業では、もともと二つの目的のために非言語メッセージを重要視している。一つは、英語を不得意とする学生の不安の解消のためである。「ターゲット言語を理解するのに必要なスキルを学生が持ち合わせていない場合、学生は非言語コミュニケーションに注目する」(Brown, p. 244)ことがあるが、筆者の担当科目はこれに該当した。もう一つの目的は、同じくブラウンが説く「活気あふれる教室空間」作りの鍵となる教師と学習者間の「信頼関係の構築」と「ポジティブなエネルギーの創出」のためである(p. 253-4)。新出単語を使った英作文を読む際に、近くに行って見守ったり、豊かな感情表現を身ぶり手ぶりで表すことで、学生が安心を感じ、且つ「面白い、楽しい」といった感覚を得られるような授業を実施する予定だった。

だが、遠隔授業導入が決まり、筆者の勤務校では実習等を除いた全科目でビデオ会議ツールシステム使用を開始することとなり、以下の方針を立てることとなった。まず、学生の通信環境保持とプライバシーへの配慮のために、ビデオ会議ツールでの顔出しを行うのは教師のみとし、学生は原則顔出しを控えることとした。そして授業環境整備のために、授業中の音声についても、学生は基本的にビデオ会議ツールのマイクをオフにし、教師の指示に応じてオンにすることとした。つまり、教師は顔出しすることで辛うじて表情などの非言語メッセージを送ることが出来るが、それに対する反応としての学生の非言語メッセージは、視覚（顔の表情や体の姿勢など)、聴覚(笑いなどの声を伴う反応)、触覚（教室における身体の物理的距離）のあらゆる感覚の遮断によって知り得ることができなくなった。また、今回の状況に限って言えば、授業準備期間もなかったため、とにかく遠隔授業を行っていかなければという気持ちだけで突き進んでいた部分が多く、学生の不安解消や、信頼関係構築といったもともとの目標について熟考することができないまま授業を進めていくしかなかった。

４．学生の非言語メッセージを伴わない言語メッセージ

ビデオ会議ツールを用いた授業形式にも慣れ、前期の授業が折り返し地点を迎えた頃、一つの変化が起こった。それは学生から言語メッセージを発信することが垣間見られるようになったことである。一つのエピソードを紹介したい。筆者の遠隔授業は、筆者のパソコン画面を学生

に共有し、ワードファイルを黒板代わりにして行うスタイルが定着していた。だが、ある時、筆者は共有の設定を忘れたまま授業を開始し、ワードファイルに板書をしながら教授内容を話し始めてしまった。その時、学生の一人が不意にマイクをオンにし、パソコン画面が共有されていないことを教えてくれた。学生から話しかけてきた初めてのエピソードだが、おそらく対面授業であったなら、この学生は筆者に向けて戸惑いの表情や黒板を指さすなどの非言語メッセージを発信していただろう。しかし、遠隔授業においてはこのような非言語メッセージは使用できない。そこで学生は、言語メッセージだけで筆者にメッセージ内容を伝えるという行動に出たのだった。当時、一年生はクラスメイトの誰とも顔を合わせたことがなく、単に共通の科目を受講している関係にしかすぎなかった。その中でマイクを自分からオンにして言語メッセージを送るのは勇気が要る行動だっただろう。ちなみに、それ以後、この学生は発言が増え、自分の発表順が回ってきた際には、解答だけでなく問題に対する感想を付け加えるようになった。

５．言語メッセージから非言語メッセージを読み取る授業実践

学科教員全員が同じ学生たちを対象とする講義科目において、筆者は一つの試みを行った。それは、今年度の遠隔授業で制限され続けてきた感覚器官というのを題材に授業を行うことだった。オムニバス形式で行うこの授業では、それぞれが自分の専門分野や研究テーマを紹介することになっていた。筆者の研究分野はアメリカ詩であるが、五感を重視する俳句の詩学に影響を受けたと言われるアメリカ詩を紹介することに決め、非言語メッセージの受信に用いる五感の重要性を言語メッセージ（詩作品）の読解から体験してもらうこととした。日常生活で使う日本語としての「センス」の用法をブレーンストーミングによって列挙し、英単語の“sense”を示しながら、「五感」の意味まで繋げていった。マスクの装着によって、嗅覚への刺激が減退し、表情の確認が困難になったことなど日常生活の「五感」にまつわる変化を話しつつ、詩作品の言葉から、どのような光景が見えるか、どのような音が聞こえてきそうか、大気はどのような感じか、温度や湿度はどうか、どのような匂いが想起されるかといったことを学生に聞いていった。驚いたのは、受講学生にとってアメリカ詩は馴染みのないものであるにも関わらず、実に多くの学生が、詩の言葉から感じ取った非言語メッセージについて発言してくれたことである。授業後の感想では、言葉から様々なイメージが連想できて面白かったというものが多く見られた。また、全教員の担当回終了後に学科の代表教員が行ったアンケートでは、筆者の授業が最も興味深かったという結果が出た。

６．おわりに

上記の学生のエピソードや筆者の授業実践は、非言語メッセージの送受信ができない遠隔授業の状況下においても、学生が安心して受講できた授業、そして面白いと感じられた授業があったことを示している。非言語メッセージのやりとりが出来なくても、言語メッセージを駆使することで、活気あふれる教室空間を作ることは不可能ではないのかもしれない、というのがこの一年の遠隔授業を通して感じたことである。当然、改善すべき課題が多くあり、上記の結果を得るまでにこれまでより長い時間を要したが、遠隔授業の継続実施が予想される来年度の語学授業にとって、この結果は一筋の希望であると思われる。

※ちなみに詩作品は、Ezra Pound の“In a Station of the Metro”を扱った。

参考文献

Brown, Douglas. H. (2007). *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy*. Pearson Education.

2020 年第 4 回英語教育実践研究会
事例発表

Universal Design for Language Learning

ジェイソン　高田ラッチフォード
(戸板女子短期大学)

Universal Design for Learning

Originating from research in computer technology and children with significant learning difficulties at the Center for Applied Special Technology (CAST), Universal Design for Learning (UDL) is an approach to designing curriculum with the aim of including all people and learning styles regardless of ability or personal differences. Its core assumption is that learner diversity is the norm not a deviation, and that barriers students encounter in the classroom are imbedded in the learning environment, rather than the learners themselves. The underlying ideology is a move away from attempting to 'fix' the learner to making the learning environment accessible to all.

The Principles of Universal Design for Learning

Essentially instruction in UDL is grounded in three principles:

1. Using a variety of methods to present information and support learning.
2. Providing learners with alternative ways to act skillfully and demonstrate what they know.
3. Maximizing motivation and engagement by offering choices of goals, content, tools, autonomy and levels of challenge.

In essence, the application of these principles is simple. Wherever possible, lesson content is presented in a variety of ways to cater for all student learning styles. A teacher presentation of a topic could be followed by video, audio, and text of the same information. Key structures, vocabulary and information are highlighted using bullet points, colored markers, teacher or peer explanation or a combination of these. Students are then given a choice of how they will demonstrate their mastery of content: visual or oral presentations, role-plays, skits, essays etc. Assessment is also varied. A 15-week general English course might include a short essay on the student's experiences of a topic, a presentation in a choice of mediums, a peer-to-peer teaching activity and a traditional grammar and vocabulary test. Given that many students struggle because their learning styles do not suit traditional methodologies, being presented with options for learning, self-expression and assessment can be life changing. Informal polling of students in 'lower ranking' institutions consistently reveals that traditional text and memorization-centric learning in secondary education was incompatible with their personalities or abilities and resulted in poor self-esteem and low achievement. In contrast, experience in using UDL based curriculums has shown Japanese college students to be capable, creative and curious given the tools and opportunity. Freedom of choice being the key. By choosing topics and language that directly connect to their interests and lives, students maximize motivation and utility of knowledge.

UDL Style Activities in the Classroom

The following are UDL style activities that have proven popular with students of all levels.

Interest logs: Students research a topic they have an interest in using the target language from any source they choose. Information can be recorded in a notebook or on a device.

Journaling with peer-reading: Students write or record a short video or oral entry on a device about their lives or what they read, watch or listen to.

Prepared talks: Students list situations in which they are likely to use target language in their daily life or future. They research the language they anticipate using in different situations, prepare imaginary dialogues or speeches and enact the

situations with other students.

Student-teachers: Students prepare and deliver explanatory “lessons” to other students about things they have an interest or expertise in.

Poster presentations: Students share their experiences or research on a topic related to their own lives and interests. The poster format allows students to express themselves by using images and keywords.

UDL Style Curriculum

An example of a blended UDL style content and task based English course for junior college fashion majors could look something like the following:

Lesson 1: Students pair up and ask each other pre-prepared questions about their own fashion styles, preferences, favorite brands and designers.

Lesson 2/3: In pairs, students research their favorite brand, its philosophy and target consumers using a prepared template. Students source their information from a variety of English language mediums: text, YouTube, documentaries and personal interviews. They then report their findings to other pairs in a format of their choice; orally, power point, videos recorded on their phones etc.

Lesson 4/5: In the same pairs, students research the designers and inspirations behind their favorite brand, again presenting their findings to other groups using a medium of their choice.

Lesson 5/6: Students research the history behind an iconic or their favorite brand’s logo and report their findings.

Lesson 7/8: In the same or new pairs, the students create a plan for their own clothing brand. They decide the design and brand philosophy, logo, target consumers and product lines and present their business plan to the other groups.

Lesson 9/10: Students design a full outfit or two separate garments, labelling all components of the design in English: garment parts, length, color, material and design philosophy. They then discuss the design with other groups.

Lesson 11/12: Students physically make the design garments to life size using real material or paper. The design specifications from lessons 9/10 are written up into a coherent explanation of the garment.

Lesson 13/14: Students present their garments in the form of a fashion show with one partner modeling and the other being the MC explaining the specifications and creative philosophy behind their garment. Alternatively, the garment is fitted to a mannequin and the students stand beside their garment and explain it to their classmates similar to a poster presentation. In both scenarios, one half of the class presents one day, and the other half is the audience.

Lesson 15: Pairs from lessons 8-14 each choose the best design presentation of the semester and prepare an explanation of why they think so. A representative from each group states their case and a vote is taken for the best design presentation.

In this style of class, the teacher’s role shifts from teacher to organizer of materials and content sources, making input comprehensible and relevant and providing feedback on output. Assessment is continuous, with each two-lesson session being awarded a grade. Student level is not a factor defining activity choice as rather than prejudging an activity to be ‘too difficult’ for students, they are given the freedom to participate in it at input and output levels that they can adjust for themselves.

References (参考文献)

CAST. (2018). Universal design for learning guidelines version 2.2. Wakefield, M.A: Author.

Takada-Latchford, J., De Wandelaer, T. (2019). ‘Universal Design for Learning and Expert Learners: Principles and Suggestions for Application.’ Meisei University General Education Research Journal 1, 129-140.

会員の広場

「仕組めない」人生

浅野 享三
（南山大学外国語学部）

専任教員の終焉が見えてきたからでしょうか。来し方を振り返ることが多くなりました。思い出せば，就活には不熱心でした。企業研究もセミナーとも無縁。取得した免許があるからという理由で，熟考せずに中学校教員を目指しました。が，準備もせずに臨んだ採用試験は不合格。怠惰のひと言。その後，目にした広告の「初任給 117,000 円」という，当時としては悪くはない額につられて街の語学学校に就職先を決めました。もっとも 2 年目になって年収計算では平均以下だと気付いたのだから，無関心というか無知だったというか…。

地元で 2 年ほど勤務した頃，東京の渋谷校勤務を命じられました。理由は「繁忙校だから」とのこと。渋谷は「異常」に人が多い場所で，例えるなら毎日が地元の「名古屋まつり」のよう！渋谷では教える仕事よりは，押し寄せる人に入学を勧誘することが優先でした。20 代の私には講師がビジネスにも関わることに耐えられず，その悩みを先輩に打ち明けたところ，進路変更の背中を押してくれました。もっとも後で報告した上司からは，「地元に戻して，教える方で頑張ってもらう予定だったのに…」と聞かされました。へえ，そうだったんだ。

その約 1 年後，私はマンハッタンの地にいました。何の縁も知人もいない初めてのニューヨーク。この頃までには，再度教員を目指すという明確な意思がありました。「外国語を学ぶなら初めが肝心だから」がその理由。帰国直前になると「大学教員になることも考えて Ph.D. までしたら」と勧めてくれる人がいましたが，無視してすぐに帰国しました。「もったいないことしたね」と言われましたが，何が「もったいない」のか，それすら理解できませんでした。「日本人英語学習者のためには，海外経験のある先生こそ中学に必要！」と。28 歳の私でした。

帰国した時期は，企業が第 2 次石油危機などの苦難を乗り越えるため海外進出を果たそうとする頃と符合します。地元の世界的企業も国内ではなく現地生産化を画策していました。そんな頃，海外駐在を終えて帰国した社員が自分の子供を通わせる学校がない，という事態が頻出しました。いわゆる「帰国子女」の出現です。母校の教授からその話を聞かされた時に「キコクシジョ？」と聞き返した覚えがあります。

南山学園は 1979 年，社会的使命から帰国子女と外国人だけを受け入れる学級（後に独立校化）を開設しました。母校の教授から，帰国者激増に対応すべく，中学・高校教職免許があり，海外経験と海外取得のマスターがある人材を求めている話を聞き，勧められるがままにお世話になることを決めました。振り返ると，このときに，一生の人生設計図が既に描かれていたのではないか，と思わずにはいられない出来事がその後に続きました。

職場の先輩で恩人に当たる方が生前語っておられた，「人生はね，仕組めないんだよ」ということばの真の意味を，その頃の私は深く理解もせずに，その後 40 年にわたり教員生活を送ることになりました。 続きは，またいつか。

【つぶやき】

中 1 の頃から 50 年以上も英語と関わった私だが，「ペラペラ」ではない。自分の努力不足であるが，ペラペラを目指すことだけが日本の外国語教育ではあるまい。50 年後は，誰もペラペラ英語は指導していないし，そんな授業もない世界になる。

写真：「仕組めない」人生のパートナーと，京都・紫野にて。

会員の広場

高等教育への COVID-19 の影響

壁谷　一広
（大阪体育大学）

全世界で問題になっている COVID-19（新型コロナ）は一部でワクチン接種が開始されたという報道があるものの未だに収束の気配すら見えず、当研究会の会員の先生方の日々の授業にも多大な影響を与えている。本稿では、英語の授業についてではなく、新型コロナ対応授業の状況を整理するとともに、より良い対応につながる可能性を検討する。

現在の新型コロナの蔓延状況下で、大学の授業は完全リモート型かリモート・対面併用型のいずれかで行われている。また、リモート授業は Zoom や Classroom を利用したリアルタイム授業と YouTube などに動画をアップして視聴させるオンディマンド授業に分かれている。年度途中に授業方法の変更を余儀なくされたため、リモート型授業の導入直後は試行錯誤による混乱が見られたが、現在ではスムーズに行われ、その利点が評価されるようにもなっている。

では、リモート型授業の利点とはどのようなものだろうか。考えられる利点は主に３つである。まず第１に、学生にとってのアクセスのし易さがある。場所（オンディマンドの場合は時間も）の制約がなく授業が受けられることは、様々な事情によりキャンパスに来ることができない学生に学びの機会を提供する有効な方法となる。第２の利点は、対面授業よりも学生の反応が良いことである。ほとんど何も答えず教員が諦めて次の学生に移るのを待つ消極的な学生や普段の対面授業では解りませんと答えて逃げてしまう学生であっても、リモート授業の場合しっかり答える傾向が見られる。第３の利点は、授業効率の向上である。リモート授業の教材や動画を作成した経験がある教員ならば誰もが実感すると思うが、対面授業の内容をリモート授業用に転換するとかなりコンパクトにまとまることが多い。対面授業でのインタラクションが含まれなかったり、授業内容を分かりやすく再構築したりすることによるものと考えられるが、学生にとっては授業の要点がとらえ易くなる。

これらの利点があるリモート授業ではあるが、学生の自己管理に大きく依存せざるを得ないこと、そのために教育の効果が学生によって大きくバラつく可能性があることが欠点として挙げられる。新型コロナ対応に欠かせないリモート授業を改善するには、学生に対する支援の充実と学習の実質化のための工夫が必要になる。ここでその支援と工夫の要点を考えてみたい。

学生に対する支援として考えられるのは主に３つである。１つ目は IT リテラシーの涵養である。リモート授業に参加できるだけの IT リテラシーがなければ、リモート授業の提供は対象となる学生にとっては不安や苦痛の種になり不利益をもたらすことになってしまう。学生のインターネット環境への配慮と共に十分な対応が必要である。２つ目は学生の心理面のケアである。様々なメディア等で報じられているように、これまで誰も経験したことがない事態の中で、日常生活のあらゆる場面で多くの制約が求められる状況においては、家族や友人から切り離され、孤独感に押し潰されそうになっている学生も少なくない。学習効果を低下させる要因の一つに不安があるが、事態の長期化により、この問題への適切な対応が重要になっている。３つ目は学習支援である。すでに述べたように、リモート授業においては対面授業と比較して教員と学生のインタラクションが大幅に減ってしまう。それにより適切な指導の提供が不十分となり、教育の成果のバラつきが大きくなることが予想される。そのため、学習支援の充実が求められるが、リモート型で提供可能な新たな対応を検討する必要がある。

以上のような支援を提供できる体制を調えた上で、形の上だけの授業で終わりにするので

はなく、しっかり学習成果を出す授業の実質化が課題になる。リモート授業、特にオンディマンド型の授業においては、受講および内容理解の確認を目的とした課題を提出し一定の評価を得れば、学習目標を達成したと見なされる。課題の提出や評価が適切に行われれば問題はないが、時間的な制約を中心とするさまざまな制約のため、実際には他の学生の答えをコピーして提出する学生がいたり、表面的な評価しか行われなかったりすることも珍しくない。リアルタイムで行う語学のリモート授業の何も見ずに口頭発表する課題でも、カメラの後ろに答えを張っておいたり、小声で助けてもらったりすることも行われている。大学での学習習慣や学びの基礎作りに重要な初年次にこのようなことが繰り返されるのであれば、学生たちは学習面で不利益を被ることになってしまう。リモート授業においても、学生たちが時間をかけて学ぶようにする工夫が必要である。

ここで参考になるのが、学習支援の先進国アメリカでの取り組みである。アメリカにおける学習支援は、学力不足の学生を対象とする補習教育にとどまらず、あらゆるレベルの学生にそれぞれの学習目標を達成させるための支援である。このような支援を効果的かつ組織的に提供しようとする動きが活発で、ボイラン（2002）は、さまざまな事例をもとに、効果的な学習支援を行うために取り入れるべき 13 の項目 [1)]をまとめている。(筆者はこの項目を参考に英語リーディングの授業改善を行い、効果があったことを確認している。)

実際にアメリカの大学およびコミュニティーカレッジでは学習支援センターを持たないところはほとんど見当たらず、学習支援の専門的な教育を受けた教職員が配置され、大部分のセンターが学習支援関連学会（NOSS、CRLA、NCLCA 等）による質の裏付けがなされている。多くの場合、定期的に研修を受けたチューターが学生に直接支援を提供しているが、最近の傾向としては、従来の学習支援に加えて、より効果的な方法として、チューターが実際の授業に参加して支援する埋め込み型チュータリングを提供する所が増えている。この状況から言えることは、授業の中に学習支援の要素を取り入れることによって学習効果の向上が期待できるということである。

COVID-19 の影響で 2021 年度もリモート授業の継続が予想されるが、その場合には、上記で述べたようなリモート授業の改善によって、より良いリモート授業を提供できるようになる。また、COVID-19 が収束した場合でも、対面型授業に学習支援の要素を取り入れる工夫によって、より効果的な授業改善が可能になる。いずれにしても、コロナ禍での苦労を今後の授業改善のためのジャンピングボードにしたいものである。

参考文献

Boylan, H. R. (2002). What Works: Research-Based Practices in Developmental Education. Boone, N.C., Continuous Quality Improvement Network with the National Center for Developmental Education, Appalachian State University.

[1)]Boylan（2002）がまとめた 13 項目は、次の通りである。①学習コミュニティを立ち上げる、②さまざまな指導法を通して多様性に対応する、③補習授業を活用する、④テストの機会を多くする、⑤テクノロジーを適度に活用する、⑥フィードバックを頻繁かつタイムリーに提供する、⑦習得学習を活用する、⑧リメディアル教育の内容を大学の学習内容のレベルに保つ、⑨教員間で教育ストラテジーを共有する、⑩批判的思考法を教える、⑪学習ストラテジーを教える、⑫アクティブラーニングの手法を活用する、⑬クラスルームアセスメントテクニック（CAT）を活用する。

＊＊＊ 会　計　報　告 ＊＊＊

本研究会は独立した研究会で、活動はすべて本研究会の参加費のみで運営されています。この場を借りて、2020 年度の会計報告を致します。

収入の部
74,898 円　(前年度繰越金)
計 74,898 円

支出の部
0 円
計 74,898 円

収入－支出 = 74,898 円 (次年度繰越金)
2021 年 3 月 20 日　会計報告　前田隆子
会計監査　北川宣子

＊＊＊ 2021 年度研究会のご案内 ＊＊＊

◆第 5 回英語教育実践研究会

日時：2021 年 10 月 10 日(日)
10：00～16：00
（開始時刻は多少変更の可能性あり）
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
事例発表（募集中）/ 情報交換会
参加費：3000 円
懇親会の参加費：5000 円
申込先：本研究会ホームページの通信欄をご利用ください。

＊＊第 5 回研究会事例発表募集のご案内＊＊

事例発表を募集いたします。皆様の日頃の授業実践の発表の場として、是非ご応募ください。

事例発表：第 5 回英語教育実践研究会
発表日時：2021 年 10 月 10 日(日)
発表時間：60 分（発表＋質疑応答）
発表会場:戸板女子短期大学(田町駅より 7 分)
発表資格： 現在、大学や短期大学で英語の授業を担当している教員、及び学校の種別を問わず、効果的な英語の授業を実践している人、めざしている人
応募締切： 2021 年 7 月 11 日(日)
応募方法： 以下の点を明記し、本研究会ホームページの事例発表申込欄から送信
●自薦 1) 応募者氏名、担当科目名
2) タイトル、要旨（和文 400 字程度または英文 300 語程度）
●他薦 1) 推薦者氏名
2) 被推薦者氏名
3) 他薦の具体的な理由
問合せ先：本研究会ホームページの通信欄をご利用ください。

なお、事例発表の内容の詳細は、この会報『授業実践研究』の第 5 号に 2 ページ分（和文の場合 21 字× 約 150 行：原稿用紙 8 枚相当）として掲載されます。会報『授業実践研究』が、皆様のご研究の公的発表の場となり、授業改善への貴重な情報提供の場となりますことを願っております。

＊＊＊ 編　集　後　記 ＊＊＊

今年度の第 4 回英語教育実践研究会は、コロナ禍で中止となった。したがって、本号の「事例発表」は、例年と違い、研究会での発表を経ないかたちでご執筆いただいている。事情を解してご寄稿くださった先生方に心より感謝申し上げたい。次年度は、対面での意見交換ができますようにと願うばかりである。

(北脇実千代)

授業実践研究 第 4 号
2021 年 3 月 31 日　発行
英語教育実践研究会
（旧・短期大学英語教育研究会）
編集委員会：前田隆子・中村公子・山崎妙・北脇実千代
英語教育実践研究会ホームページ
http://tan-eiken.jimdo.com/

本研究会は2017年に「英語教育実践研究会」と名称変更後も、この URL を引続き使用しています。ご利用ください。研究会の機関誌は『授業実践研究』に名称変更し、みなさまの研究成果やご意見を発表してまいります。